

世界につながる横浜港 ～神奈川県から広がるコーヒーサプライチェーン～

はじめに

横浜におけるコーヒーの歴史は長く、幕末における外国人居留地や開港と共に異国の文化を受け入れる風土が醸成されてきた。そして、第二次世界大戦以前は、日本人がブラジルのコーヒー農場へ移民労働者として移住し、このことがきっかけとなってブラジル産のコーヒー生豆の輸入が始まった。坂井によると、その消費地として喫茶店「カフェーパウリスタ」が横浜で開店後「チェーン展開が行われた点である。当初の横浜と銀座だけでカフェーパウリスタが終始したのではなくて、日本国中に 20 店ほどが出展された」¹。日本人にとって「コーヒー」という新しい味と香りの出会いが次第に人々の嗜好に加わり、坂井はコーヒーが日本国内に浸透したと述べている。輸入量については、1877 年（明治 10）のコーヒー生豆輸入量はわずか 18 トンだったが、1921 年（大正 10）に 380 トン、1937 年（昭和 12）には 8,571 トンに急激に輸入量が増加した。²

戦後になると横浜発祥とされるコーヒー製造企業と言われるキーコーヒー株式会社（旧木村コーヒー）、キャラバンコーヒーで親しみのある株式会社ユニマットプレシヤス（旧ミカドヤ商店）、三本珈琲株式会社を始め、コーヒーを取り扱う企業が相次いで誕生した。

この背景にはコーヒー消費が広がる要因として、1920 年代から日本国内でコーヒーブームが起こり、「喫茶店によるネットワーク型消費の展開、世界のコーヒー市場の影響、都市化と覚醒文化の進展など社会経済要因」³があると坂井は主張している。しかし、戦後におけるコーヒー消費に関する調査がされていない。

2023 年（令和 5）の横浜税関発表の貿易トピックス「コーヒー生豆の輸入」によると、横浜港は、2022 年（令和 4）に輸入金額ベースで 1989 年（平成 1）より 34 年連続で全国 1 位の輸入量を記録し、輸入金額においても過去最高を記録したと発表した。2023 年（令和 5）に横浜税関が貿易トピックスにおいて「コーヒー生豆の輸入」について公表している。そこには 2022 年の全国のコーヒー生豆の輸入量 90,032 トン、輸入金額 2,151 億 50 百万円だった。横浜港は、輸入量 179,712 トン、輸入金額 1,122 億 46 百万円で輸入量や輸入金額ともに取引全国 1 位の港になった。さらに輸入金額では過去最高を記録していたのである。

そこで、本レポートでは貿易トピックスの採用した 1980 年代から 20000 年代までの横浜

¹ 坂井素思、「コーヒー消費と日本人の嗜好趣味」『放送大学研究年報』放送大学、2008、36

² 坂井素思、「コーヒー消費と日本人の嗜好趣味」『放送大学研究年報』放送大学、2008、35

³ 坂井素思、「コーヒー消費と日本人の嗜好趣味」『放送大学研究年報』放送大学、2008、39

港のコーヒー生豆の輸入量を中心に日本人のコーヒー消費スタイルの観点で輸入量増加の要因を明らかにする。

1 ブラジル移民によるコーヒーの広がり（戦前_1920年代）

皇国植民合資会社を主宰する水野龍氏により日本における第1陣となる781人の日本人ブラジル移民を1908年（明治41）にサンパウロに送り出し、10回に渡り総計1万4,886人（3,747家族）の日本人がブラジルに渡った⁴。この移民の大部分はサンパウロのコーヒー農場に働き、現地に定住してブラジル国籍を取得する者も現れた。日本コーヒー史によるとブラジルからのコーヒー輸入は1916年（大正5）から始まり、1923年（大正12）のサンパウロ州政府と水野龍氏の間で取り交わされた無償支給の契約が終了するまで総輸入量は約60万2400kgだった。大量のコーヒーを受け入れることになった水野龍氏は、株式会社カフェーパウリスタを創設し、1923年（大正12）に東京と横浜にカフェーパウリスタという喫茶店を開店させた。その後、全国に26店舗を展開したことでコーヒーの香りと喫茶店の文化がブラジルコーヒーの宣伝と共に新しい味が日本人に加わった。

一方、ブラジルでは1930年代にはいるとコーヒー豆の生産過剰で廃棄対策がなされた。上述した1937年（昭和12）までに8,571トンの輸入量の急増の背景として、ブラジルへの移民によるブラジル政府との交流以外に、ブラジルでのコーヒーが生産過剰となり、その輸入先として日本が選ばれ、継続輸入されたことも増加した要因の一つとなっている。こうした輸入事情が相まって、喫茶店数は全国に1924年（大正13）に159店になり1937年（昭和12）に1,000店を超えるようになった。喫茶店の出店数はコーヒーを飲料とする文化が人々に根付いていたと言える。坂井は、第一次コーヒーブームの到来と述べている。

2 横浜港発展とコーヒー輸入自由化（戦後_1960年代～1980年代）

第1次コーヒーブーム到来後も継続し、コーヒー生豆は戦後移行も輸入されていた。日本には中小規模を含めると非常に多くの港がある。港湾法では、漁港以外の港を規模の大きさや国際的な重要度で分類しており、国や都道府県が各港を管理している。コーヒー生豆の輸入船寄港地となる横浜港は、国際戦略港湾と国から指定を受け、日本における経済活動をする上で重要な港である。日本には5つの国際戦略港がある。それらは東京港、横浜港、川崎港、大阪港、神戸港で、国内や国際輸送の両面で機能が高く重要な港とされている。日本経済の発展と共に京浜地帯を所有する神奈川県では日本経済と港の発展が大きく関係している。例えば、コンテナと呼ばれる巨大長方形の箱型コンテナ⁵の役割が大きい。このコンテナを利用することで輸送時間の短縮、省力化、非常に大量の貨物を搭載可

⁴ 国立国会図書館の特別サイト「ブラジル移民の100年」によると、水野龍（1859（安政6）-1951（昭和26））は、土佐出身で斎藤修一郎とともに皇国植民会社を創設し第1回ブラジル移民に同行した。1924年（大正13）と1950年（昭和25）にブラジルに渡り、ブラジル移民事業に大きく貢献しブラジル移民の父と呼ばれている。

⁵ コンテナのサイズは、20フィートと40フィートの大きさがある。

能にする積載量に寄与している。アメリカでは1967年（昭和42）頃から外国貨物輸送にコンテナが開発され使用されるようになった。コンテナの活用が進むにつれ、船はコンテナを輸送できる大型のコンテナ船へと進化していった。

このように輸送革新となったコンテナリゼーション⁶が始まる前までの輸入貨物の梱包は個々に梱包され、一つ一つ人の手で船に積載されていた。横浜港は、首都圏近郊で重要な貿易港となっていたため、重化学工業を中心とした工業の発展と都市化の進展により横浜港を含む臨海部には大企業が立地する工業港が形成され、さらに東京と商港機能の関係で結ばれており、コンテナを積載した大型外国貨物船が出入りできる岸壁やコンテナを操作できるガントリークレーンの建設を急いで整備する必要があった。その後、横浜港は、外国貨物輸送船を受け入れ可能となり日本経済の成長とともに横浜港も発展した。

日本では1960年（昭和35）にコーヒー生豆の輸入自由化が始まり、翌年の1961年（昭和36）にインスタント・コーヒーの輸入自由化も開始された。2つの輸入規制緩和の背景として、コーヒー製造企業にはレギュラー・コーヒー製造とインスタント・コーヒー製造と2種類ある⁷。一方、個人経営の喫茶店が1960年代から次第に増加傾向で総務省などの統計によると個人経営の喫茶店の数は、1981年（昭和56）のピーク時に15万4,630店が全国にあった。そして、インスタント・コーヒーも合わせるように一般家庭へ普及した。1960年代から1980年代にかけて喫茶店と家庭で飲料する消費スタイルに広がった。⁸の到来となった。このように横浜港の整備が進み、大型外国貨物船が寄港することで大量の品々が日本に輸入され、コーヒーの生豆も輸入品の一つとなって日本人がコーヒー消費の増加を後押しした。

3 消費スタイルの変化とコーヒーサプライチェーン（1990年代～2000年代）

1995年（平成7）の読売新聞朝刊の地域ニュース紙面では、横浜港における「輸入コーヒー生豆の量は前年比11%増となり全国のシェアが4割となった」⁹と報じていた。さらに1999年（平成11）になると同紙ではコーヒー生豆の輸入量と金額ともに過去最高になった。同紙による大手商社担当者のインタビューによると、コーヒー飲料が家庭や職場に定着したことや低価格コーヒーチェーン店の出店増加が要因と述べていた。それ以外に1995年（平

⁶ コンテナリゼーションとは、世界共通に規格化されたコンテナを使用し貨物の積み替えや輸送を行う方式である。

⁷ 一つはレギュラー・コーヒー製造業で明治初期から発展した産業である。1980年（昭和55）の日本コーヒー史によるとレギュラー・コーヒー製造業は約400社で中小零細企業がほとんどである。UCC上島珈琲株式会社、キーコーヒー株式会社、株式会社アートコーヒーは、レギュラー・コーヒー製造企業である。残りの一つとなるインスタント・コーヒー製造企業は、インスタント・コーヒーの輸入自由化開始後に始まった比較的新しい業種である。1980年（昭和55）における主な製造企業は、ネスレ日本株式会社、味の素AGF株式会社、株式会社鈴木コーヒーである。

⁸ 味の素AGF株式会社のホームページ「コーヒー大事典」内にある歴史によると、1965年（昭和40）～1983年（昭和58）をファーストウェーブ、1995年（平成7）以降にはセカンドウェーブとし、シアトル系コーヒーチェーン、例えばスターバックスコーヒーのようにカフェスタイルの店舗が国内で展開した。また2013年（平成25）になるとサードウェーブとし、こだわりのコーヒーを提供するお店が増えたとしている。本レポートでは第一次から第三次ブームを同社の時期を消費スタイルの変化としている。

⁹ 読売新聞、朝刊、地域ニュース「前年比11%増で横浜港輸入コーヒー最高 全国の4割にも」1995

成 7) に阪神・淡路大震災の影響があったと推測する。コーヒー生豆は輸入されると植物防疫法に基づき植物検疫の対象となり、即座に生豆の現物検査を税関で実施される。阪神・淡路大震災で神戸港が被災に合い、検閲検査をすることが困難になったことにより、外国貨物船の寄港地が神戸港から横浜港に移行し、輸入量増加を押し上げたのではないだろうか¹⁰。

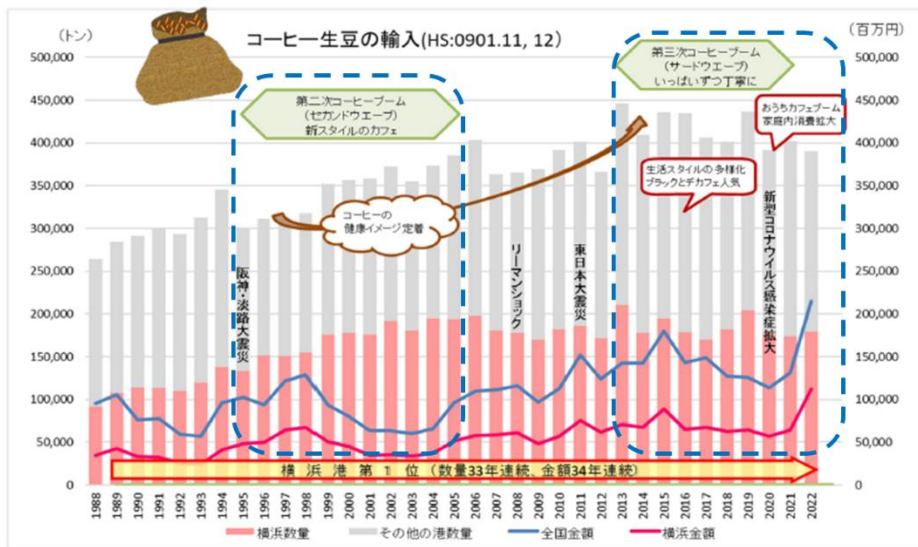
一方、日本人のコーヒーに対する消費スタイルにも変化が起こっていた。スターバックスコーヒーに代表されるようなコーヒーチェーン店が 1990 年代中ごろより相次いで出店され、フレーバーコーヒーが登場し、苦みに加えて甘味やバニラのような風味のあるバリエーションがメニューに出現した。図 1 のコーヒー生豆の輸入では第二次コーヒーブームにおいて、喫茶店を愛用していた消費者層とは別に、新スタイルのカフェを愛好する若年層が消費者として加わったことがブームに寄与したのではないだろうか。そして 2013 年（平成 25）頃になると、こだわりのコーヒーにこだわり一杯ずつ丁寧に淹れるコーヒー店を淹れるプロフェッショナルなバリスタのいるカフェが登場し、図 1 の第三次コーヒーブームが到来した。図 1 にもあるようにサードウェーブでは「いっぱいずつ丁寧に」というコンセプトが消費者に広がり、一杯を淹れるまで待っている時間、空間、香り、こだわりのあるコーヒーを飲むような消費スタイルに変化していったと思われる。

清涼飲料メーカーの商品にも変化が見られるようになるが 2000 年代にはいつてからである。2023 年（令和 5）の業界地図における清涼飲料メーカーでコーヒー飲料を製造する企業の販売ランキングは、1 位：コカ・コーラボトラーズ・ジャパン（販売ケース：4 億 7,000 万ケース）、2 位：サントリー食品インターナショナル（販売ケース：4 億 1,410 万ケース、売上：1 兆 2,689 億円）、3 位：アサヒ飲料（販売ケース：2 億 5,070 万ケース、売上収益：3,578 億円）、4 位：キリンビバレッジ（販売ケース：2 億 590 万ケース、売上収益：2,466 億円）、5 位：伊藤園（販売ケース：2 億 40 万ケース、売上：4,007 億円）だった。

各社におけるコーヒー飲料商品は、上述のランキング企業の順にジョージア、COSTACOFFEE（コカ・コーラボトラーズ）、ボス、クラフトボス、カフェスターバックス（サントリー食品インターナショナル）、ワнда（アサヒ飲料）、ファイア（キリンビバレッジ）、TULLY'S COFFEE（伊藤園）を製造している。東日本における主な製造工場の場所は図 2 の通りである。

図 2 には販売ランキング上位 1 位から 3 位の企業の製造工場が神奈川県を中心に首都圏から東日本にあることが分かる。中でも 1 位のコカ・コーラボトラーズ・ジャパン、2 位のサントリー食品インターナショナルの製造工場が神奈川県に 3 工場あるのが興味深い。例えば、サントリーコーヒーロースタリー株式会社は、神奈川県海老名市に 2001 年に設立され、ボスの豆の焙煎を行っている。

¹⁰ 元横浜税関職員の藤嶋嘉幸（Lib 活 3 期参加生）へのインタビューによると、コーヒー生豆の植物検疫における現物検査をすることで生豆に寄生する有害虫が見つかり、消毒や廃棄の処置を輸入港の税関で実施するため神戸港で検疫検査ができなければ荷主は横浜港に輸入港を変更することはあると言っていた。



(図1) 横浜港および全国におけるコーヒー生豆の輸入量 (筆者一部加筆)
 出典：横浜税関貿易トピックス「コーヒー生豆の輸入」



(図2) 東日本における清涼飲料メーカーのコーヒー製造工場 (筆者作成)

おわりに

1960年(昭和35)からレギュラー・コーヒーやインスタント・コーヒーの輸入自由化やコンテナリゼーションによる大量貨物の輸入が実現したことで横浜港の整備が進み、世界中のコンテナ船の寄港地となって世界とつながる機会が非常に多くなった。輸入品の一つにコーヒーがあり、日本人のコーヒーの消費スタイルが時代と共に変わることによってコーヒー消費量が増え輸入量増加に結び付いた。清涼飲料メーカーにおけるコーヒー飲料の製造拠点が神奈川県を中心に製造され商品となり日本全国に広がっていた。現在では、日本は世界3位のコーヒー生豆の輸入国となり、日本人にとって様々なシーンでコーヒーの多様

性に楽しみが増えたといえる。世界につながる横浜港、そして神奈川県から全国に広がるコーヒー。戦後の半世紀をかけて、消費スタイルの変化に合わせて神奈川県からコーヒーバリューチェーンが形成されていることが分かった。横浜港にコーヒー生豆を取り扱う企業が多く集約する要因については次の課題とする。

【参考文献】

- ・ 国立国会図書館「ブラジル移民の100年」（2024/9/8 アクセス）
<https://www.ndl.go.jp/brasil/greetings.html>
- ・「神戸から喫茶店再興 経営術伝える検定創設「だんらんの場」店主が接客法も」『読売新聞』2013年6月17日（夕刊）
- ・坂井素思（2008年）「コーヒー消費と日本人の嗜好趣味」『放送大学研究年報』放送大学、25巻、P33-40
- ・全日本コーヒー協会「コーヒー歴史年表」（2024/11/10 アクセス）
<https://coffee.ajca.or.jp/webmagazine/library/history/>
- ・全日本コーヒー商工組合連合会（1980年）『日本コーヒー史 上巻』全日本コーヒー商工組合連合会
- ・全日本コーヒー商工組合連合会（1980年）『日本コーヒー史 下巻』全日本コーヒー商工組合連合会
- ・相馬州彦（1995年）「1994/95年代世界のコーヒー生産と日本の消費動向」『日本熱帯農業学会』熱帯農業、9巻、1号、P77-95
- ・日本税関協会（1970年）「飛躍する横浜港—貨物量の急増とコンテナ化に対応」『貿易と関税』日本税関協会 18巻 2号、P76-79
- ・日本税関協会（1975年）「横浜港の近代化と貿易動向—首都圏国際貿易港の近況」『貿易と関税』日本税関協会、23巻2号、P55-60
- ・箕輪京四郎（1998年）「「コーヒーの経済学」序論
コーヒーの生産から消費までをたどる」『文教大学国際学部紀要』文教大学、9巻、1号、P77-95
- ・長谷川泰三『カフェパウリスタ物語』文園社（2023年）「貿易トピックス コーヒー生豆の輸入」（2024/8/25 アクセス）
<chromeextension://efaidnbnmnibpcjpcglclefindmkaj/https://www.customs.go.jp/yokohama/toukei/topics/data/202306coffee.pdf>
- ・マルク・レビンソン（2007年）『コンテナ物語：世界を変えたのは「箱」の発明だった』村井 章子訳、日経 BP 社